

(翻訳) 「中国語の歴史的方言地理試論
およびその文化的背景」^{注1)}

原 瀬 隆 司

古代漢語方言の地域区画に、直接参考となるような歴史上の文献はない。この問題を取り扱い、研究した者もほとんどいなかった。実際、これまで揚雄『方言』の簡略化した資料を使い、『前漢方言区域圖』を描いた者がいたほかには、古代の漢語方言区画図に関して発表されたものは未見である。^{注2)}

歴史上の文献のなかには、方言の地域区分に関する直接的な記載を見つけ出すことはできないが、それでも下記に示したような言語資料に基いて、現代方言の地域区分から遡って、古代方言の地域区分を大雑把にでも推測することができる。先ず第一に、さまざまな文献即ち、史書、字書、韻書、經書の注疏、筆記雜記の中の、方言関係資料と類別される断片資料がある。第二に揚雄『方言』、郭璞『方言注』などの歴代の方言学の専門書がある。第三には歴代の移民に関する資料が挙げられる。第四には各地方志中の方言資料がある。第五には、歴代の行政区画がある。第六には歴史的地名がある。こうした資料を用いて、『詩經』時代、前漢・後漢、西晋（五胡十六国の乱以前の）、南宋と明清（局地的範囲に限定）の方言区分について、一応の線引きを試みた。以下、それぞれの時代ごとに検討を行なっていく。

第一章 『詩經』時代の諸夏言語^{注3)}の分布区域の再構

『詩經』時代の始めから終わりまでの期間は非常に長く、ほぼ西周初年から春秋中葉までの、5世紀余りに及んだであろう、と思われる。詩三百篇には成書年代を割り出せる作品が数えるほどしかない。そのうちの最古の作品は、『幽風・破斧』である。詩中に言及する、“周公東征”は紀元前1114年の事であるからだ。また、最も新しい作品はおそらく『陳風・株林』であり、この詩では、陳靈公と夏姫の、胡乱な関係に言及しているが、これについては《左伝》宣公9年と10年にその記載があるから、それに依れば、BC600年或いはBC599年の出来事である。

古代の文献には、《詩經》の書かれた頃の方言の地理的差違に関して、断片的ないくつかの簡単な記載しか見とめられず、根拠を示して、当時の言語や方言の使われた地域を画定することは、極めて難しい。例えば、《礼記・王制》に「五方の民、言語は通ぜずして、嗜欲も同じからず」とあるのが、それである。ここで言う“五方”の正確な土地がどこかは、知ることはできない。しかし、この当時、まちがいなく、お互いにことばが通じない、異なった言語や方言が存在していたことは確かである。上に引いた《礼記》のことばは、わが国の古代の文献において見ることができる、言語地理の差違についての最も早い記載である。

この当時、方言が存在したからこそ、清代の官話のような“雅言”が流行したのである。《論語・述而》には、“子の雅言する所は、詩、書、執礼、皆な雅言す。”とある。“雅”はこの字を借りて、“夏”を表わしていた。この“夏”は西周王朝の直轄地一帯の古名である。このため当時の“官話”というのは、その畿内一帯の方言のことであり、これはとりもなおさず、周室が使用していた言語なのである。士大夫が作る詩と外交文書に用いる言語は、ともに“雅言”であった。当時、対外的な交流には、詩を詠んだり、志を主張する、といった行為が常にあった。このため、各国の士大夫は詩が作れるだけでなく、士大夫たちが詩のなかで用いる言語も同質であることが求められた。こうして初めて、お互いに“志を言う”ことができたのである。政治、人の招聘、御触れ、同盟などにも、ある種の統一された言語が要求された。“雅言”は周の天子が諸国との連絡や諸国相互間の交流には欠かせないものであった。この当時或いはその後の経典や著書、例えば、《易》や《論語》もこの雅言で書かれている。

《詩経・国風》は、その歌謡が生まれた土地ごとに、その章立てがされており、全部で以下の18の地域から構成されている。即ち、周南、召南、邶、庸、衛、王（東周）、鄭、齊、魏、唐、秦、陳、檜、曹、豳、雅（“夏”のこと、西周）、魯、宋である。

二つの《雅》である、《小雅》と《大雅》は西周の畿内の詩である。西周の畿内とは、今日の病西省中部にあった。三つの《頌》のうち、《周頌》は西周の宮廷を詠った作品である。そのため、当然この作品は、その畿内で作られた。《魯頌》に詠われた地域は、今日の山東省である、魯の国の作品である。《商頌》は周代の宋国の作品で、その地は今日の河南省東部と江蘇省西北部に当る。

二雅と三頌はともに、国風が作られた18の地域で生まれた。《国風》諸篇のうち、《王風》、《周南》と《召南》は国名ではない。《王風》は東周域内の作品で、その詠われた地域は今の河南省中・北部である。《周南》とは周公が支配した南方地域を指し、ほぼ北は汝水まで、南は今日の長江北岸の漢水と長江の合流する地域を指す。なぜならば、《周南・汝墳》で、“彼の汝の墳堤に遵う”といているからである。又、《周南・漢廣》では、“漢の広きや、泳するべからず。江の永きや、方いかだするべからず”とあるからである。《召南》は召公が支配した南方の地域を指し、大まかに言って、南は武漢以北の長江北岸の地である。《召南・召有汜》に、“江には 汜汜水あり”、“江には渚渚水あり”、“江には沱沱水あり”とあるからである。この他の十五の国風はいずれも、諸侯の国の歌である。このため《詩経》の採取地域は大まかにでも、推定することは出来るのである。

《詩》三百篇は、各地の民間の詩歌で、当初は各地の方言で詠われ伝えられたに違いないが、その後編集された時には、士大夫の筆が入り、そこで用いられた言語は、統一された雅言であった。《詩経》に使われた言語に均一性が保たれているまさにその為に、今日、《詩経》の語音系統を研究する際にも、やはり三百篇の韻部の系統が一致していることに気が付くのである。漢語の上古音研究は、今日に至るまで、その主要な研究資料は《詩経》と諧声字に拠っている。上古音の語音の体系に対して、一致して広く認める結論は今日に至るまで、まだ出し得ていないが、各研究者

の上古韻母系統の再構では、すでにその方向で一致を見ている。《詩經》の言語内部の均一性は疑問のないものである。そのため、《詩》三百篇には、当時の方言間の分岐した状態の反映を見出すことはできない。

先秦時代の文献のなかで、言語間の分岐に対し、明確な記載があるのは、次の地域についてである。即ち、楚、齊東、南蛮、戎である。これにより、当時これらの地域の言語間の分岐が、最も注目されるものであったことがわかるのである。それらの地域では、中原一帯とは言語が通じなかったことを、以下に掲げる、幾つかの言語資料は物語っている。

《左伝・襄公十四年》：戎子駒支云う；“わが諸戎の飲食・衣服は華とは同じからず、贄幣シヘイ進物も異なり、言語達せず。”と。“諸戎”とは、ほぼ今日の山西、陝西北部と甘肅にあった。

《孟子・譏文公上》：“今や南蛮馱もず舌の人、先王の道を非とす。子、子の師に倍背きてこれに学ぶ、亦曾子に異なれり”“馱”はもず。これは南の蛮人の話し振りがもずの鳴き声に似ることを言っており、勿論言っていることがわからないのである。春秋時代、呉人が衛公は呉人に捕らえられたが、その後衛公が帰り、“夷言”を効まねたが、その夷言こそが呉語のことで、ここで言う“馱舌”といったことばに属するものであったのであろう。

《孟子・万章上》：“此れ、孔子の言にあらす齊東の野人の語なり。”齊東とは今日の山東半島の東部にあたり、萊夷のいた所である（今日に至るまで膠東方言は依然特殊である）。また、《顔氏家訓・音辞篇》では、“それ、九州の人は、言語同じからざるにして、生民以来、固より常然変わらないたり。《春秋》の齊言ことばの伝を標し、《離騷》の楚詞ことばの経と目されてより、それ、之方言を較明らかにせし初めなり”このように見ると、当時齊の言語の他所との違いは人の注目を引くものであったことがわかる。

《孟子・滕文公上》^{注4)} “孟子、戴不勝人名に謂って曰く、‘子は子の王の善からんことを欲するか。我明らかに子に告げん。ここに楚の大夫あらんに、その子の齊語せんことを欲せば、則ち齊人をして諸に元たらしめんか。’曰く、‘齊人をして之に傳たらしめん。’曰く、‘一の齊人之に傳たるも、衆多くの楚人之に畵かまびすしくすれば、日ひびに撻ちてその齊語せんことを求むと謂えども、得べからず。引きて、之を莊・嶽のあいだに置くこと、数年ならば、日ひびに撻ちてその齊語せんことを求むと謂えども、亦た得べからず。’”ここでは、当時、齊語と楚語の違いが非常に大きく、身を現地に置かなければ、それらを習得出来るものではないことを物語っている。

《左伝》も楚語の差違に注目している。《宣公4》に云う：“楚人は乳を谷と謂う；虎を于菟と謂う”この二語はいずれも基本語彙である。考証に依れば、“于菟”は古代チベット・ビルマ語の漢字表記^{原注1)}である。古代に巴・蜀には楚人が多く、荆・楚との関係が特に深かった。秦が巴・蜀を滅ぼしてのち、蜀人は始めて中原地区の言語に通じ、その後中原の言語に接近していっ

原注1) 張永言《語源札記》手稿コピー本（著者贈呈本）を見よ。

原注2) 童恩正《古代的巴蜀》四川人民出版社1979を見よ

た。^{原注2)}

前漢の劉向の著書《説苑・善説》には、春秋時代の榜桴の越人の歌った歌が記載されているが、その歌は当時の漢字で語音を記録しており、その上漢語で翻訳がなされている。これを見ると、当時、越語は翻訳がないと通じない言語であったことがわかる。また、考証に依れば、この歌に使われている言語は壮族の言語と密接な関係がある。^{原注3)} このことは、当時の越語が中原のことば、諸夏の言語の一方言などではなく、僮・侗族の祖語である可能性が非常に高いことを物語っている。古代の呉、越は国は異にしていたが、種族は同じであり、両国の言語は通じていたはずで、それらはともに古越語であった。この点は、先秦と前・後漢の歴史的地名からもそれを知ることができる。^{原注4)}

以上まとめれば、次のようになる。戎、呉越、南蛮、齊東、楚と云ったこれらの土地の言語は、諸夏以外の言語であり、燕、狄、巴、蜀、淮夷などの土地の言語もまたおそらく夏族の言語ではない可能性が非常に高い。これらの域外地域と十五国の国風に採取した範囲を相互に考証して、《詩経》時代の諸夏の言語分布図を再構した。図4-1を参照。

当時の“楚”の地域は、漢水と長江との中流域にあったはずで、そのなかで、長江以北の地域は、《周南》に関わりある地域と地域的に重なっている。おそらくこの一帯は諸夏の民族と域外民族、そしてそれらの諸言語が混在していた可能性が強い。時代が少し後れて、屈原の手になる《楚辞》に用いられる言語こそがその当時その辺りで混合した言語であった可能性が強い。全体的に見れば、《楚辞》の言語は、異なった種族の言語ではないことははっきりしているが、《楚辞》の言語の少なからぬ部分が、やはりこの時代の古漢語とは明らかに違うのである。例えば、《楚辞》中によく使われる、虚字“兮”は、その用法が極めて特殊である。《詩経》にも、“兮”は使われるが、頻度は割りと少なく、その上、その用法は《楚辞》と異なる。

これまでに推測してきた諸夏の言語区域には、当然方言の差違があったはずであるが、文献の中に、その直接的な記録を探し出すことは極めて難しい。《左伝・文公十三年》には、貴重な言語資料があり、それによれば当時の秦と魏の方言が互いに通じていなかったことが証明できる。《左伝》のその箇所では、次のように書かれる。(晋の)六卿が諸浮に集り、魏の寿余に魏を裏切ったふりをさせて秦に行かせ、(秦にいる)士会を巧みに誘って、彼を晋に戻そう、と相談した。続けて、(《左伝》は記す)“秦伯は河西に師出陣し、魏人は東に在り。寿余曰く、東人のその二三と言を司る者を請う、吾これと先発せん。士会を使遣わせ。”と。士会は東人で、(秦伯が攻め入ろうとする)東国である魏国の言葉を解した。そのため、秦人は仕方なく彼を遣わした。このくだりは、秦と魏の方言間の差がやはり非常に大きく、意思疎通がままならず、そうであったからこそ魏人(の寿余)が言葉の通じる者の助けが必要で、“士会を(秦から誘い出し)晋に還かえ”ら

原注3) 韋慶穩〈越人歌与壮语的关系試探〉《民族語文論集》中国社会科学出版社1981年を見よ

原注4) 周振鶴、游汝桀〈古越語地名初探〉《復旦學報》1980年4期

せたのであろう。

第二節 前漢・後漢時代の方言区画の再構

前節では《詩經》時代には周王朝はその畿内の方言を雅言と考えていた、ということを描した。この“雅言”は、今日謂うところの“民族共通語”にはほぼ相当する。当時、諸国は皆、雅言を自国の標準語としており、そのため諸国の方言に対する求心力は強まった。一つの社会に、標準になる共通の言語があると、それが無い時よりは、その社会の中の方言の差違が少ない、というのが一般的な通則である。

しかし、戦国時代に至ると、周王朝は既に衰退し、周室は主として奉られる地位を失った。このため、周室の方言を標準音とする正しい言葉であった“雅言”は自然とその効力を失った。これを受けて、《説文解字序》は次のように云う。“その後、諸侯は政政治に力努め、王に統治められず。悪礼・樂の害あり、すでにしていずこも皆その典籍を去うち捨てり、分かれて七国と為り…言語は声語音を異にし、文字は形を異にす”，と。こうして、いずれの国も自国の首都の方言を標準音とした。そのため、戦国時代の方言は春秋時代より更にその差が大きくなる傾向にあった。すなわち、方言の遠心力が強まったとも言えるのである。《詩經》時代、諸国の方言にはもともと差違があったのだが、《説文序》で、戦国時代以降“言語は声を異にす”と強調していることは、次の2つの状況を指している、と考えられる。第一は、戦国以降は雅言が二度と現れることはなかったため、各国は語音が異なってしまったこと。第二に、本来からあった方言間の差違は、雅言が無くなってしまったことにより、益々大きくなったということである。

秦の始皇帝は六国を併合し、“同文を書く”政策を実施した。文字は統一されたが、アルファベットとは違い四角い漢字は、音声を綴ったものでないので、文字だけを統一しても言語の統一には至らなかった。それどころか反対に、このことにより方言間の分岐がほったらかしにされてしまった。なぜなら、それぞれ異なった方言を使う人々でも共通する文字の助けがあれば、その考えを表わし、交流することが可能になるからである。朝廷の地方への政令、地方から朝廷への報告、そして各地間の重要な交流はいずれも統一した文字の助けがあれば、それを行うことができた。一方、漢代の経書家は先秦の經典を解釈するのに熱心であったにすぎず、それはすなわち周王朝の雅言で書かれたものではあったにもかかわらず、韻書の類の標準音を提供する書物を編集することなかった。政府の言語政策はなるがままに任せる、と言ってもいいものであって、士大夫は先秦の典籍に使われる言語を真似て文を作り、一方、各地方の人々はこれまで通り、自らの方言を使用していた。

こうした状況は、魏晉南北朝になり、はじめてやや変化が現れた。《顔氏家訓・音辞篇》に次のように云う：“これよりその後、音韻蠡出し各々土風あり、通するに相非笑す。共に帝王の都邑を以って方俗を参校し、古今を考核し、これが為に折衷す。」と。当時幾冊かの韻書は出版された。しかし、韻書の編者はいずれも自分がいる国の都の方言を標準音としており、全国に通用する標

準的な雅言を定めていたわけではなかったのである。例えば、晋の呂静の《韻集》、南齊の周顒の《四声切韻》などがあったが、惜しいことに、これらの、地方の韻書はどれも散逸してしまった。

漢代の方言地理分布に関しては、直接的な文献の記録がないので、揚雄の《方言》、それと許慎の《説文解字》中の方言資料に基づいて推測をするしかない。

《方言》は、方言地理に関する記載に、次の三つ体裁をとっている。一つは、どの語が通語か、凡語か、凡通語か、通名なのか、または四方に通ずる言葉なのかを、はっきりさせている点。二つ目は、どの語がどこの言葉で、或いはどことどこの辺りの言葉かをはっきり示していること。三つ目は、どの語がどことどこの間で通用していたかを明示している点である。

《方言》には、多くの箇所では、“凡語、通語、凡通語、通名、四方の通語”という言い方をしているが、これらの概念はどれも、方言区域の語であるという限定から外れた語彙ばかりである。であるから、それらに基いて、語音、語彙、語法が同質の漢民族の共通語が当時すでに生じていたとは、けっして断定することはできない。ただ、肯定出来るのは、当時の各方言間に、多くの共通の語彙が存在していたことだけである。どことどこの間で通用した語かということに及んでは、その語が通用する範囲が比較的広い語であったことを指している。

《方言》で引用する地域の名称には、戦国時代の諸国の名、例えば韓、魏もあるし；民族の地区名、例えば朝鮮、東甌もあり；州名、例えば幽、冀もあり；郡名、例えば代、汝南もあり；県名、例えば曲阜、巨野もあり；その他に、山河の名を用いた地名、例えば淮汝の間とか海岱の間というのも見られる。このように、地理概念上異なったレベルでの方言資料が示されており、その上各地に関する資料も、とても整合性のあるものとは言えない資料なのである。現代の方言地理学の観点から見れば、これらの資料はとても理想的なものとは言えないものである。そのため、これらの資料に基づいただけでは、方言の親疎関係を確定し、漢代の方言の地域区分の線引きを行なうことはできない。林語堂は、かつて《方言》で引用する地名の親疎関係に基づき、漢代の方言は以下の12の区域に分けられる、と推測した。すなわち、秦晋、鄭韓周、梁西楚、齊魯、趙魏の西北、魏衛宋、陳鄭の東端、楚の中部、東齊と徐、呉揚越、楚（荊楚）、南楚、西秦、燕代の各区域である。

このような状況の中で、注目すべきは、《方言》の示している資料のうち、秦晋のものが最も多く、この語義の説明も一番詳しいことである。このことは、著者が前漢の首都であった長安を中心とする、秦晋方言を熟知していたこと、そして当時、秦晋の方言が全国で最も重要な地位を占めていたことを物語っている。この他、《方言》は秦晋を同一の区域と見なしていることである。ところが、春秋戦国時代には、この二つの地の方言は依然として大きな違いがあった（第一節《左伝》秦魏方言に関する資料参照）。このことから見ると、前漢から後漢に替わる頃、秦人の東進により、秦晋の方言はこの頃既に混合して、一つになっていたことが考えられる。春秋以前の、諸夏の言語の中心地域は成周一帯（現、河南北部）であった。この頃、秦の国の言語はまだ西の地域に偏っており、諸夏の言語の中でも、それほど重要な地位を占めていたわけではなかったが、

前漢から後漢への移行の頃には、秦晋の方言は一躍してこの地域一帯の顕要な地位を占めるに到った。秦漢の後、漢語の最終的な形成とその後の発展のなかで、秦の言語が決定的な役割を果たした。後世の北方漢語は、とりもなおさず当時の秦晋と雒陽一帯の方言を基礎に次第に形成されたものである。

《説文解字》で、使用地点を明らかにしている方言は全部で191語で、各々の語の解釈の体裁は《方言》と似ている。そこで取り上げている語のうち、《方言》と重複する語は60あまりあるが、その解釈にはそれぞれ精粗の差があり、まったく同じというわけではない。これらの語の解釈部分で言及する方言区域、地点は全部で68箇所ある。

《説文》が挙げる方言資料は《方言》には、はるかに及ばない。挙げる回数の最も多い区域は“楚”で、合計23箇所である。このことは、おそらく当時の楚方言の差違が最も顕著であったことを物語っている。次に多いのは、“秦”で、19箇所（これには秦晋と合わせて言及した5箇所は含まない）。このことは、許慎の時代、秦晋方言も重要な地位を占めていたことを物語っている。次は“齊”で、16箇所。これも突出している。

揚雄は前漢から後漢に到る頃の人であり、許慎は後漢の人である。《説文》《方言》の二書が共に秦晋を重視していたことから考えると、二人の生きた年代は離れていなかったであろう。許慎の生年と没年は考証されていないが、おそらく後漢後半期の人ではなかったであろうという可能性が高い。というのは、後漢の都が洛陽にあったにもかかわらず、《説文》に引く洛陽一帯の方言が極めて少ないからである。

《方言》と《説文》の関係資料に基けば、漢代の方言区域は図4-2の示す地図と考えてよからう。図中の朝鮮、北狄、西戎、越、東齊、淮夷は少数民族の言語区域である。

第三節 西晋時代の方言区画の再構

西晋末の五胡十六国の乱は、北方漢民族の南方への大移動をもたらした。そして、また南方漢語の区画の枠組みをも大きく変化させた。先ず、ここでは五胡十六国の乱以前の漢語方言区画がどのようであったのかを見る。漢籍資料のうち、移民に関する資料である、郭蒼の《方言注》、《爾雅注》、それに《世説新語》の中の関連章句はいずれも本研究の格好の資料である。

漢末の混乱と三国の争いのなか、北方の人口はかなりの規模で移動した。こうした人口の移動が北方方言に混乱をもたらし、それまでの方言地理に変化をもたらした。

《後漢書・董卓伝》：“卓は…天子を西都長安に遷す。初め、長安は赤眉の乱に遭い、宮室・營寺、焚滅し余すものなし。この時、唯に高廟、京兆の府舎を有すのみ。遂にすなわち時幸なるや？後に、未央宮を移す。ここに於いて洛陽の人数百万人をことごとく長安に移す。”また、“初め、帝入関し、三度戸口尚数十万を補助ける。権、祀相い攻め、天子東帰し後より、長安城空なること四十余日。強き者は四散し、羸弱き者は、相い食む。二三年間、関中に復た人跡無し。”とある。上の二つの資料から見れば、漢代の関中と中原一帯の方言は既に混交したものとなっていた。

《三国志・魏志・蒋济伝》には：“…太祖は従わず、而して江淮の間の十余万の衆、皆驚きて呉に走る。”と、ある。また、《三国志・呉志・呉主伝》には：“初め、曹公は江浜の郡県（孫）権の略する所となるを恐れ、徴して内移を令す。民はうたた相い驚き、廬江、九江、蕲春、広陵より、十余万、皆（長）江を東渡し、江西は遂に虚なり。合肥以南は、惟だ皖（安徽）城を有すのみ。”と、ある。上の二つの記載は、漢末にはすでに、大量の北方人が北方の方言を呉語地域にもたらしたこと、また、漢代には、淮夷、江夷、徐夷の方言或いは言語が漢代末までには、基本的には南にすでに移動していたことを物語っている。三国時代以降、江淮一帯に入ったのは淮河以北か或いは中原一帯の方言であったはことは間違いない。

《三国志・魏志・衛覬伝》には：“関中膏腴の地、頃く荒乱飢饉に遭い、人民の荊州に流入する者、十余万家なり”と、ある。これは、漢末、関中の方言はすでに、荊州地区に拡散して、荊州の方言の地盤が狭まったことを物語っている。

《三国志・魏志・管寧伝》には：“管寧は、字を幼安といい、北海の朱虚の人なり。…天下大いに乱れ、公孫度が令して海外に行くを聞き、遂に原及び平原王烈らと遼寧に到る。度は館を虚にして、以ってこれを候つ。既に往きて度に見えるに、すなわち山谷に庵す。時に難を避ける者は多く郡南に居す、寧は北に居し、また遷去するなく、後に漸く来りて之に従う。”と、ある。この記載により、当時漢語がすでに遼寧にまで拡散していたことを知ることが出来る。

漢末、人民の移動・移住は、歴史的資料に記載されたものはその一部にすぎない。人の移住は断続的であり、時に発生するが、それは決まった方向がなく、北方内部における移動もあれば、南方或いは北方の辺地への移動もある。こうした移動は、漢語の混交と統一を促した。特に、北方方言内部での統一を促進した。その過程は晋代の郭璞の《方言注》に見ることが出来る。郭璞は、晋代の方言をよく用いて揚雄の時代と比較した。揚雄の時代には、多くが、どここの地域の語と云っていた語が、郭璞の時代にはもう通語となっていた。これらの語は、元々はほとんどが北燕、朝鮮、東齊、海岱、燕、代、関西の方言であって、とりわけ元々が楚語で、それが後に広く使われる通語となったものが多い。以下、その例を示す。：

娥，女嬴，好よきなり…趙，魏，燕，代の間では姝と言う。注：昌朱の反，また四方通語なり。

茫，衿，奄，遽あわただしなり。呉揚は茫という。注：今，北方に通然たり。

日弗，晒，ものを干すなり。揚，楚は通語なり。注：また今北方は通語なり。

凡そ，草木で人を刺す…江湘の間では，これを棘いばらという。注：《楚辞》に曰く，“曾枝は憚尖り，人を刺す”，また通語のみ，巳力の反。

このような方言が通語に変わる現象の発生は、第一には後漢時代に内陸部の長期にわたる安定した状況によって、各地の人々に頻繁な往来や密接な交流をもたらされたことによる。そして、都と文化の成熟した地域の方言が通語となった。この他に、辺境地区の遊牧民族の侵入は、国境近くの域内にいた人々を内地への移住に駆りたてた。こうしたことも方言の融合を加速させたのである。次に、三国時代には戦乱が頻繁に起こり、人民は常に流浪をよぎなくされた。これもま

た方言の混交と統一をもたらしたのである。

だが、当時の呉語及び楚語の北方方言との差違はやはり大きなものであって、その後の南北朝まで、依然としてそう云った状態が続いていた。このため、北方人はこの二つの方言には特に敏感であった。《世説新語》と《北史》の数カ所の記載はそのことを非常によく物語っている。

《世説新語・排調篇》：“支道林，東に入り，王子蛟兄弟に見えて返る。人問う，‘諸王に見えて，如何？’と。答えて曰く，‘一群の白頂鳥に見えるも，ただ啞啞と喚く声を聞くのみ。’と。”また，“王大將軍，年少の時，旧古くは田舎農家の名あり，語音は亦楚（音）なり。”楚語は耳にすると，白頂鳥ムク鳥，ヒヨ鳥が，ガーガーと鳴くように聞こえた。よその土地の人には，まったく聞いても理解できなかつたのである。

《排調篇》では，また次のように云う：“劉長真，はじめて王丞相に見みゆ…劉既に出でて，人問う，王公は何を云いしか，と。劉曰く：‘未だ他の異なるを見ず，惟だ呉語たるを聞くのみ’と。”問うたのは，“どんな話を聞かれたか？”であつたのに，その答えは“只，呉語を喋っていることだけはわかつた。”であつた。こうして見ると，劉長真も呉語を聞いてもわからなかつたことがわかるのである。

《北史》には，“丹陽王劉旭，童僕を罵るも，（その）声は雑にして夏を裔ぐ。公座にあると言えども，諸王は毎常に之を侮り弄ぶ。”との記載がある。方言の違いはそれを聞けばすぐその差違に気付くだけでなく，人の蔑視にあうことが多々あり，高い位に在る者も，それは避けられなかつた。上掲の文から晋代を見るに，楚語，呉語との差違はまちがいなく非常に大きかつた，と推測できるのである。

郭璞が《方言》と《爾雅》に注を付けた際，やはり揚雄の手法を真似て，晋代の通語と方言の地域的差異を指摘した。郭蒼の言及した地域は，以下のいくつかであつた（記載された回数順，一回のみの記載は採らない）：江東，荆楚，東齊，関西，河北，巴蜀である。

上に掲げた資料およびその分析によれば，当時の漢語方言は大まかに言つて，以下のいくつかの地域に分けることができる。すなわち，河北，東齊，関中，中原，巴蜀，呉，楚である。このうち，“関中”には漢代の関東と，晋代の関西が含まれる。《方言注》に言及する関西方言には7項あり，それらは漢代ではいずれも関東方言であつた語である。このように見ていくと，晋代には関西方言，関東方言という区別はなくなつており，すでに混交してしまつていたことがわかる。

推測される晋代の方言の区画は，図4-3のとおりである。

第四節 宋，金代の方言区画の再構

宋代の方言区画について，歴史的資料には直接それを記載したものはみられないし，また漢代の揚雄の《方言》や，晋代の郭璞の《方言注》、《爾雅注》といった，それらを使って分析し，判断できるような内実のある著作もない。しかし，この時代の方言区画についても，前節同様，次の三つの面からそれを推し量ることが可能である。すなわち，第一は，唐・宋代の移民資料，第

二は、宋人の筆記に見られる、方言について触れられた個々の断片的資料、第三は、北宋時代の行政区画と現代の方言区画と対比して、その重なる部分を見つけ出すことである。

移民の、方言区画の形成と変化に対する重要性は言わずもがなのことである。これについては、下文で項を改めて詳述する。

宋人の筆記には、方言区画に関して記載したものは極めて少ないが、その中から当時の人々の方言の違いに対する見方を読み取ることができる。その見方は、間接的に方言区画の事実を反映しているのである。関連する資料を下に掲げる。

沈括の《夢溪筆談補》卷一：“經典釈文には、熊安生の輩、もとは河朔の人、反切は、北人の音を多く用う；陸徳明は呉の人、多く呉音に従う；鄭康成は齊の人、多く東音に従う、の如きなり。‘壁に肉の好き有り’の、肉の音は揉、北人の音なり。今河朔の人、肉を云うに揉となし、贖を云うに樹となすが如きなり。”

黄鑑の《揚文公談苑》：“今の姓胥、姓雍は皆平声なり。春秋の胥臣、漢の雍齒、唐の雍陶皆これなり。蜀中は上声、去声に作りこれと呼ぶ。蓋し、蜀人率概ね平声をもって去声となす。”

劉攽の《貢父詩話》に、“周人は語は転じて、亦た関中の中をもって蒸となし、虫を塵となし、丹青の青を萋となす如きなり。五方、語は異なり、閩は高をもって歌となし、荆楚は南をもって難となし、荆を斤となす。”

沈括の《夢溪筆談・雑誌》：“閩人は大蠅を謂うに胡蠅となす、亦蠅の属なり。”

陸遊の《老学庵筆記・卷六》には、“四方の音には、訛り有るは、即ち一韻尽く訛る。閩人の高の字を訛り、則ち高を謂いて歌となし、勞を謂いて羅となす。秦人の、青の字を訛り、則ち青を謂いて萋となし、経を謂いて稽となす。蜀人の、登の字を訛り、則ち一韻みな合口なり。呉人は呉の字を訛り、則ち一韻皆開口なるが如し。他は此れに仿似る。中原の惟だ洛陽のみ天地の中を得て、語音最も正なり。然るに、弦を謂いて玄となし、玄を謂いて弦となし、犬を謂いて遣となし、遣を謂いて犬となす類は、亦た自ずと少なし。”

趙彦衛の《雲麓漫鈔》卷十四には、“且つ四方の音同じからずして、国、墨、北、惑の字、北人は穀、木、ト、斛となし、南方は即ち小転して唇音となす。北人は俗に近く、南人は雅に近し。”

これらの断片的な資料から少なくとも以下の二つの点を指摘することが出来る：

第一に、北方方言は、内部が比較的均一化した方言大区として、すでに形成されてきたこと。北方語が一つのまとまった方言であるという概念は、宋代になり、はじめて歴史的資料に登場してきた。これまで、先秦の經典から漢代の揚雄《方言》や晋代の郭璞《方言注》に至るまで、方言の地域に言及する際には、いずれも北方語を一つのまとまりあるものとは見なさず、それをいくつもの部分に分けて、別々に検討を加えてきた。このことは北方内部の分岐が依然として非常に大きかったこと、そして一般人にはまだ“北方語”といった概念が形成されていなかったことを物語っている。北宋になって沈括がはじめて、“北人音”という概念を言い始めたが、それはとりもなおさず、“北人音”が一つのまとまりあるものとして示され、考えられるように意識され始

めたことをものがたっている。隋の陸法言の《切韻序》では、当時すでに“南北の是非，古今の通と塞不通”ということについて言及している。しかし，その中の“南北”とはおそらく大まかな概念をいった語で，正確に北方語とか，南方語を指しているわけではない。

当時の北方語内部では，大まかに言ってその以前と同様に，秦，中原，河朔，蜀の四つの小区に分けることができる。注目されるのは，唐，宋代の文献にはもう東齊，淮夷，汝南といった比較的狭い地域を記載しなくなったことである。

北方漢語は前漢、後漢時代には，まだ多岐多様な状態にあった。このことは《方言》の挙げる多くの地域の中から読み取ることが出来る。しかし，北方は漢末の戦乱や三国の争乱，五胡十六国の戦乱を経て，人口流動の規模とその数がいずれも極めて多かった。こうした歴史的背景により，北方漢語に混交が生じたが，後には隋・唐・宋三代の長期にわたる安定した発展を経て，北方では漢語が互いに融合して，内部の共通性が大いに強まった。この唐、宋代になると“北方語”は一つの方言大区として，次第に明確になり始めたのである。北方語の漢語の中での基礎方言としての地位も，まさにこの時期に正式に確立した。唐、宋及びそれ以降に当時の北方口語を基礎とする文学作品である、詩歌、小説、話本などが多く現れた。

第二に，宋代の南方には少なくとも呉、荆楚（湘）、閩という，三方言が存在した。特に注目すべきことは，唐，宋代に閩人の方言に関する記載がやっと現れはじめたことである。“福佬”（閩人）という民間の概念も唐代に現れ始めた。閩語の字音には文言音と白話音の区別がある。唐，宋代には科挙制度が盛んであり，科挙に合格するために，読書人は北方語から読書音を学んだ。読書音の流布は閩語を同じ方向に向かわせる求心力となった。

宋代の各方言区の境界線に至っては，そのうちのある幾つかの部分，また想定することが可能である。今日では，現代の漢語方言区と次レベルの方言区の境界線が，その大きな部分で，南宋時代の一級或いは二級行政区の境界線と重なっていることがわかっている。それは，宋代の行政区画の線引きがされた時に，すでにその頃から人文地理の要素が考慮され，方言地理が人文地理の主要な内容の一つであったことに拠るし；また，現代の南方方言の地理的分布の様子が，南宋時代にはすでに基本的に形成され，その後変更が極めて少なかったからであり；それと同時に南方の二級行政区の境界線のかなりの部分が，南宋から清末に至るまで基本的には変わっておらず，一級の行政区の境界線の変化もさして大きくなかったためである。行政区境界線が長期にわたって安定していたため，行政区内での方言の一致が保たれた。そして，言語の変化の方が，往々にして移民と行政区の変化に後れをとってしまった。このため，現代の漢語方言の区画と南宋の行政区画の境界線が重なり合う部分が，南宋方言区画の境界線であると，推定することが出来るのである。

以下，宋末の方言区画につき検討を加えていく。

1 呉語区

南宋時代、呉語の分布地域は今よりやや広がった。大まかに言って、今日の浙江の全域、上海市全域、蘇南（寧鎮地区は除く）、蘇北の通州と海門、江西の婺源、玉山、上饒、永豊、福建の浦城を含む。

今日の浙江の、福建と境を接する地域である、慶元、泰順と蒼南（1982年平陽から分離）南部の閩語は明代の後に、福建から持ち込まれたものである。

今日の皖南地区の銅太方言は、依然全濁音を保っている、徽州方言は全濁音が既に消失してしまっただが、その他の特徴は呉語にきわめて似ており（浙江の嚴州方言がこれに似る）、現代方言地理の区画からはその帰属が定まっていない。こうしたことから、全皖南地区の方言の基礎はやはり呉語であると考えられる。今日、その姿が他の地区の呉語と大いに異なってしまった原因に次の二つのことが考えられる。第一は僻地である山岳部が長期にわたり外界と隔絶に近い状態に置かれたこと。第二は、他のいくつかの地区は官話の侵蝕を受けたが、それは南朝がかつてこの一帯に南豫州を置き、北方からの漢人を住ませたからである。特に太平天国の戦乱の後、官話は以前にも増して一挙に入ってきた。南宋時代の全皖南地区（西北隅の当塗を除く）は、以前は呉語区に属していたはずである。江西の婺源の現代方言は徽州に近く、贛語には近くない。またこれも徽州と同じ言語プレートにあるに違いないのである。歴史的な行政区での婺源は、唐代と南宋、北宋時代では徽州（或いは歙州）にずっと属していた。

福建の浦城方言は呉語区に属するが、その由来は過去にまでずっと遡ることができる。浦城はまさに浙江と福建との交通の要衝の地で、陸路から閩地区に最初に入った漢人は、即ち後漢末に会稽から浙南を通り浦城を経て閩北の山岳地帯にたどり着いた人々であった。^{原注6)}五胡十六国の乱の後、中唐、唐末と五代及び南宋、北宋の時代に、北からやって来た移民はやはりこの経路で福建に入った。このため、浦城には、後漢末から以降、呉語を話す民が定住しただけでなく、その後も彼らの故郷の呉語地区とは一貫して行き来があった。今日の浦城のことばと浙江の呉語の異同を比べると、そのことばは境を接する浙江の西南に近く、且つ浙北の特徴をも兼ね備えていることがわかる。

今日の呉語の西南部の境界の地は、浦城に沿って北に行くと、江西の上饒、広豊、玉山に入る。この三つの土地の方言はいずれも全濁音をまだ留めている。歴史上から見れば、玉山は唐代前期に衢州を分割して、常山と須江などの県が置かれた地であり、本来、衢州方言とは同じ言語プレートに有るものである。上饒、広豊は、これまで衢州とは同一の二級行政区にあったわけではないが、この地域一帯は歴史的には早くから呉語を話しており、最近になって呉語が江西の域内に広がったわけではないのである。南方方言地理の変遷の大勢から見ると、東晋から隋唐に、客

原注6) 浦城は福州（漢代は治県）を除き、最も早く建設された県城で、初めて置かれた時は漢興と
いった。北からの移民は江山港（或いは黄潭水）に沿って遡り、仙霞嶺を越えて、南浦溪に下
り、この地に落ちつき県城を建てた。

家がはじめて南下し、江西の中部に移る以前、呉語の西の境界は、この三県のずっと西にあったはずである。客家が南への五度に及ぶ移動によって、江西にもともとあった方言の性格を変化させ、その上、呉語の西の境界を東に縮小させてしまった。現代の江西の上饒、広豊、玉山の三箇所における全濁声母の分布図からは、濁音が浙江の側に向けて、縮小している現象をみることができる。これに拠れば、南宋時代、呉語の西の境界は饒州の東半分と信州全域を含んでいたことがわかる。中唐の時には、少なからぬ北方人が饒州に移住したが、しかし、その多くは、西部の平原地帯に住んだが、東部の山岳地帯は呉語を話す原住民が住む地域であったはずである。

もしも、南宋時代と西晋以前の呉語の、長江南岸における分布を比べてみると、一つの際立った差違は鎮江から南京、当塗一帯がすでに北方語区に変わってしまっていることに気付くであろう。

西晋末以前、江南はまったくの呉語区であった。五胡十六国の乱の後、長江を渡り、南下した士族と庶民は、或る統計に依れば、百万人以上にのぼったそうである。南朝の東晋は、僑州を設け南下した漢人を居住させた。当時設けた僑州には、司、豫、兗、徐、青、并などの州があり、僑郡、僑県が一段と多くなった。これらの僑郡や僑県のほとんどが当時の都である建康府の付近に集中していた。《晋書・地理志》の統計によると、この一帯には、外地から来た者のために置かれた郡、県が二十あまりあった。建康から京口に至るラインは、山東、徐淮一帯からやって来た者が最も多かった。そのため、京口（現、鎮江）には徐州治が置かれた。建康以南の姑熟（現、安徽の当塗）には豫州州治が置かれた。僑州を置いて後、それに南の字を加え、南徐州、南豫州とした。南豫州の地域は、南は徽州以北にまで及んでいるが、北からの流民と士族はほとんどが建康に近い、長江に沿った姑熟、襄垣、繁昌の一並びの地域に集り住んだ。これらの事実は、現代の皖南のこの一帯における方言が北方語により接近していることから、想像がつくことである。

南下した漢人がもたらした北方語と、江南に元からあった呉語の差違は非常に大きなものであり、そのため当時の政治生活にも影響を及ぼした。歴史的資料の記載によれば、北からやって来た士族の間では洛陽の言葉を喋る必要があった。東晋の宰相、王導は南方の士族と連絡をとる必要からよく呉語を話したが、それを聞いて北方の士族は蔑んで、王導は何の取柄もないが、ただ呉語は話すことだけは出来る、と言った。この記載は、或る面では北方の士族の高慢さを言っているほかに、もう一面では東晋王朝の初期には、建康一帯ではこの二つの大方言の衝突がたいへん際立った問題であって、かつて激烈な両者の競争があったことを語っている。競争の結果は当然、王室が使用する、またその数で勝る北方人の方言が勝利したのである。

南宋の時代、長江北岸での呉語区は通州だけであった。当時の通州には、今日の南通、海門と如東の一部が含まれていた。啓東と如東の一部の地区は当時はまだ陸地を形成していなかった。今日この一帯（南通市街区が既に官話に占領された以外の）は依然として、呉語区である。年代を更に遡ると、今の啓東と海門は南朝時代にはいずこも海中にあり、今の南通だけが長江入り口

の荒涼とした砂州であった。後になって、南岸の呉語区の民が少しずつ入り開拓していき、呉語をその地にももたらした。北宋の時代に砂洲が北岸と連なり、海門、啓東と如東の一部地域がつながって陸地を形成し、南通の呉語がそれらの地にまた拡散していった。

今日の靖江県も、南宋の時代には長江の中の砂洲の一つであり、そこで話されることばはやはり当然呉語であったに違いない。靖江が北岸と繋がったのは、最近のことであり、行政区画上ではずっと後の清代になって、やっと江南から離れ、江北と同じ行政区になった。今日の靖江県では大部分の地区で依然として呉語が話されている。この県の呉語と泰興、如皋の蘇北語との境界線ははっきりしており、基本的には県境が方言境界となっている。しかし、ここで言う、靖江で使われる呉語とは、主に語音の音系統について言ったもので、その語彙の面について言えば、蘇北の江淮官話の深刻な侵蝕を受けたものである。往々にしてそれは蘇北語彙に江南なまりを加えたものがそうである。例えば：

靖江 烟筒 脑壳子 脸 害病 东西 哪个
江南 烟囱 头 面孔 生病 物事 啥人

今日、泰興と境を接する地帯では、靖江人しか泰興語を学ばず、泰興人で靖江語を学ぶ者はいない。靖江が北岸に接して後、元々あった呉語は次第に北方語に侵蝕を受けた。そして将来はおそらく北方語に取って代わられてしまうだろう、というのが全体の趨勢である。

現代呉語内部の幾つかの方言小区の境界線は、南宋時代の行政区画の境界線（或いは幾つかの二級行政区画が合併して以降の外延の境界線）とは基本的には一致している事に鑑みて、それらの重なり合う部分が、南宋時代では呉語内部における各小方言間の境界線であったと推定することができる。

以下、小方言ついでに大まかに説明をしていく。

第一の小方言には、太湖流域と寧紹平原が含まれる。この一大地域は開発が比較的早くになされ、古くから呉語の中心的な地区であった。

第二の小方言は、皖南地区で、この地域の北部は南宋以前にはすでに北方語の影響を受けていたが、南宋になると、半北方語化した呉語にすでに変わってしまっていたと考えられる。第一と第二の小方言の境界線の北の部分は、境界線の両側の府の境界線と重なり合っている。南の部分の境界線は巖州府の域内を通っており、巖州北部の桐廬と分水は第一の小方言に属している。第二の小方言の特徴は官話の侵蝕を受けて、半北方語化しており、現代では全濁声母は清音化したか、或いは全濁声母を残すが、大量の語彙が北方語化している。桐廬と分水では純粋な呉語の特徴を残している。

第三の小方言は、衢州、婺州と処州が含まれる。衢州は、唐の頃、婺州の信安県の置かれた処である。処州の開発は比較的小おそく、後漢の末に、この地によりやく平昌、松陽の二つの県が置かれた。この二県は秦代にすでに設けられた大末県（衢州の前身である）に最も近い。このために、この二県は衢江流域の民が靈溪を遡上して仙霞嶺を越え、松陽溪に下りてここを開拓し

たものであると考えるべきである。このことが原因でこれら三州の方言は当然お互いに近いものなのである。

第四の小方言は、台州である。現代の台州の寧海方言は寧波と近い関係にあるが、臨海とはその差が比較的大きい。南宋時代の情況が今日のようなものであったかは、非常に論断するのが難しい。このため、この小方言と第一の小方言のこの辺りの境界線はしばらく未定境界としておく。

第五の小方言は、温州である。温州方言は南宋時代にもうすでに非常に特色のあるものとなっていた。このことは戯曲の早期作品である《張協状元》からその一斑を見ることができる。(第七章参照)。現代の樂清県の清江渡以北では、台州語が話されているが、清の道光年間以前はこの一帯は温州語が話されていたはずである(第七章参照)。今日の温州小方言の泰順方言は麗水に近く、温州には近くない。それは次のことが原因だ。明の景泰三年に泰順を置いた際、時の政府は処州人をそこに移住させた。また光緒年間の《泰順分疆録》には、“附郭近郷に県を設ける時、括人を安插移住さすこと最も多く、今に至るも言語は猶お、麗水、松、遂の音に近きがごとし。”ここでいう、括人とは括州人を指し、処州府は唐の初期には、括州と称された。南宋時代、泰順の一帯はまだまったく荒涼たる地であり、その西側は、洞宮山脈によって、処州とは隔絶されているから、おそらく処州人がそこに移り住んで、処州語を持ち込んだとは考えられない。このことから、この小方言と第三小方言の境界線は洞宮山(これはまた温州と処州の区画の境界線でもある)を境とする。

2 粵語区

現代の広東省の方言は、3大区に分けられる。広州を中心とする粵語、梅県を中心とする客家語、汕頭を中心とする潮州語(閩南語の一種)である。この他海南語も閩南語の一種であるが、当地福建の閩南語とは違いがかなりある^{原注7)}。この3つの大区の境界線は歴史的な行政区画境界線と部分的に重なっている。その中で粵語と客家語との境界線の北の部分と南の部分は、宋代の行政区画境界線と完全に一致している。北の部分は広州と英徳府、連州との境界線であり、南の部分が広州と惠州との境界線である。真中の部分の新豊、佛岡と龍門は、宋代では広州府に属していたが、現在では客家語を使っており、昔とはやや異なっている。粵東の閩南語と粵語の境界線は、宋代の行政区画とは一致しない。しかし、東の部分の一致しない所は僅か二県だけである。大埔と豊順は、古くは潮州府に属していて、今日では客家語を使用している。図4-5を参照。

大埔と豊順の客家は、多くが宋代末に閩西から移住してきたもので、《崇正同人系譜》には、“饒氏が江西の永豊を起程出發せしより、はじめて福建の長汀に止まり、繼いで広東の大埔に移った、時は宋の末なり”，と記している。また、《興寧吳氏譜》、《梅県吳氏譜》に依ると、“吳氏は福建の

原注7) 広東省方言区画は《広東地図集》(1966年)に依る。

寧化を起程発ちしより、大埔、豊順等の地に遷り至る、時はまた宋の末なり。”とある。

しかし、梅県一帯は、北宋の末には客家の移民が既にその多数を占めていた。温仲和の《嘉応州史》には、“南宋の王象之、著す所の《輿地紀勝》一書は、其の引く所の図経、今は既に伝わる無し。其の梅州に図経を引きて云う有り：郡は土曠広く、民墮にして農に業る者鮮なし、悉く汀、贛より僑寓する者これを耕す。”と、ある。また、元豊年間の《九域志》には、梅州は“主は五千八百二十四にして、客は六千五百四十六なり”と記す。外地から来た家が土着の者を既に上回っていた。勿論、外地からの者が必ずしも、すべて客家であったとは限らない。

このため、南宋時代には、客家語と潮州語との境界線は大埔、豊順の北にあったはずで、これは、即ち梅州と潮州の行政区画の境界線と一致している。

粵語と客家語の境界線の真中の部分の不一致も表面的な現象である。佛岡、新豊、龍門の三県は、現代では生粋の客家の住む県というわけではなく、ここの客家は明末、清初と近年に移住してきたものである。明代以前はこの辺りは依然として粵語の世界であった。注目に値するのは、この三県の以東、以北、以西が生粋の客家の住む県になってしまっことである。例えば、河源、翁源、英徳がそうである。これらの生粋の客家の住む地の客家は五代以降にはもうここに移住してきたものである。このため、この真中の部分は、南宋の頃の行政区画の境界と完全に一致しており、これは即ち、広州と婦州、英徳府、循州との境界線と一致する。

今日の粵語は、広西ではその東南部にしか分布しておらず、これらの地は北宋、南宋の廉州、欽州、鬱林州、横州、貴州、潯州、容州、梧州、藤州、賀州、昭州、(恭城、昭開の二県を除く)に当る。粵語の、広西での分布の境界線は、欽州、横州、貴州、潯州、昭州(平楽以南)の西の端と完全に一致する。この他、南寧市街区でも粵語を使用するが、これは近代以来広州の地位の急速な高まりがもたらした結果である。

3 湘語区^{原注8)}

南宋の時代、北方語と湘語の境界線は、今日の湖北と湖南の省境にあった。

北方語は、西晋末に、北方人が初めて大規模に移動したのに伴い、湖南に大規模に侵入した。南朝の劉宋政権は、現在の湖南省の域内と湖南・湖北両省境界地帯に、南義陽郡と南河東郡を外來者のために置いた。南義陽郡は今日の安郷県の西南を中心としており、そこへの移民は義陽郡(現、河南の信陽)から移ってきた人々であった。南河東郡は今日の湖北の公安、松滋と湖南の華容、安郷、澧県一帯に置かれた。移民は河東(現、山西の西南部)人を中心としているが、今日の河南、皖北、蘇北の民も混ざっていた。このことから、湖南の常德一帯では、南朝の時代に北方語の侵入が嘗てあったことがわかる。しかし、当時はまだ洞庭湖以南にまでは至っていなかった。

原注8) 周振鶴、嘎汝傑〈湖南省方言区画及びその歴史的背景〉《方言》1985年4期参照

唐代の天宝から至徳年間の安史の乱の時、再度北方人は大量に南下することを余儀なくされた。《旧唐書・地理志》は、“至徳より後、中原に故こと多く、襄鄭の百姓、兩京の衣冠貴人ことごとく、江湘に身を投げ、故に荆南の井邑は其の初めに十倍し、すなわち荆南節度使を置く。”この時の移民は以前より更に遠距離に及び、湘資流域にまで至ったし、その規模もより大きく、荊州（江陵府）にまで及び、武陵一帯の世帯数は十倍も増えることになった。

こうした大量の北方移民は、北方方言という巨大な衝撃をもたらし、今日の常德地区の官話の基礎が、唐代中期にはすでに定着していたということができよう。これと同時に、湘資の下流流域に達した北方方言は、元からあった湘語との接触と融合により、今日のような湘語の基礎がつくられた。

その後の歴史的行政区の変遷は、一方では、常德地区の方言を更に湖北方言に近づけたし、もう一方では、北方方言をして、沅水を遡らせ、沅水流域全体を官話区域とさせるまでに影響を与えた。

唐の天宝年間の後、澧、郎の二州は江南西道から山南東道に編入され、湖北西部と同じ一級行政区内に置かれた。至徳以降には、荆南の人口の大幅な増加により、荆南節度使が置かれたが、更には、澧、郎の二州（現、常德地区）と夔、峡、忠、万の諸州を江陵を中心とする行政区に編入した。この後、宋末に至るまでの五百年間、常德地区はずっと湖北西部を中心とする行政区の中に組み入れられてきた。このため、この一帯の方言と鄂湖北方言は同じ方向に近づいていった。今日に至るまで、常德の語音体系と江陵の語音体系は今も尚多くの共通点を有している。

一方、宋代に置かれた荆湖北路は、沅澧流域全体と湖北南部を、江陵を中心とする同じ行政区に編入されたが、このことは沅江中流域と上流域の開発に大いに役立った。この辺りはもともと少数民族の五溪蛮（漢代には武陵蛮と云った）の居住地であった。宋代の治世者はこの地区を意識的に開発し、多くのそれ相応の措置を採った。神宗は熙寧年間には章惇を遣わして“蛮事を制”し、沅水の上流域に兵を進め、南北の流域蛮族を“平定”した。その後、沅水の中・上流域に、辰、沅、靖の三州を置いた。このように官話の影響は沅水下流域から中・上流域に向かって広がり、このため、官話区の地盤は沅澧流域全体にまで次第に拡張して行った。

上述の歴史的背景に照らして、洞庭湖以西の荆湖北路と荆湖南路の境界線を、南宗時代の湘語と北方語の境界線であると、推測することができる。こうすると、洞庭湖以東の鄂州（現、湖北東南部の長江以南の地区）と岳州は湘語区に属することになる。鄂州地区は今日に至るまで、その方言が依然として特に複雑で、湖北のその他の地区の特徴とは自ずと異なっている。特に注目するものは、蒲圻、崇陽と通城が今日に至るまでいまだに濁塞音（有声破裂音）或いは濁塞擦音（有声破擦音）を保っていることで、これは湖南の臨湘と同じである。この一帯は秦代には長沙郡に属していて、漢の初めに長沙国が管轄した。

今日の湖南省東部には、北から南にかけて、細長い帯状の贛方言の地帯がある。これらの地の贛語は五代以降江西からの移民がもたらしたものである。江西人の湖南への移住は五代にはすで

に始まるのだが、最大規模の移住は後の明代に集中している。湖南の七種類の地方志、それと邵陽、新化、武岡、新寧、城歩、湘陰、大庸、汝城など九県の氏族志に記載された資料に依れば、五代から清代に他の省からの移民は、合わせて599族にのぼり、そのうち五代に移ってきたのは僅かに26族で、北宋が39族、南宋が61族、明代が急激に増えて341族にのぼり、清代はまた下降して48族になった。このため、湘東の贛語は実際には明代以降になってやっと形成されたのである。

南宋時代、湘語の東の境界は、おそらく江西の域内にまで入っていたと思われる。所謂“贛語”とは、漢語方言の分化の歴史ではわりと遅くに形成されたもので、それは客家語と共に発生した違いはない。客家人は東晋以来、幾度にも及ぶ大規模な南下をするとともに、絶えず江西一帯の方言の質を塗り替えていき、次第に客家語と兄弟関係にある贛語を形成するに至った。西晋以前は、今日の江西一帯の方言は湘語、呉語とより多くの共通点があった。このことは少なくとも二つの面から実証することが出来る。第一に、湘・贛・浙の多くの地名に用いられる字が同じであること。例えば、圳、坪、岫、潦などがあり、そしてこれらの地名に使う字は北方では決して使わない字である。地名に用いる字と地名を付ける習慣が共通していることは、その方言が共通していること証である。(詳しくは第六章を見よ)。第二に、呉、湘語は今日に至るまで、いずれも全濁声母を残しているが、今日の江西の鄱陽湖一帯も同様に有気清音を濁声母に読む現象を残している。地縁から見れば、鄱陽湖一帯は西を湘北に接し、東を皖南の呉語区と接している。特に、隋代にはこの広大な地区の方言の類似性が、やはり極めて注目された。陸法言の《切韻序》では、“呉楚はすなわち時に軽淺を傷損ない、燕趙はすなわち多く重濁を傷損ない、秦隴はすなわち去声を入と為し、梁益はすなわち平声、去と似る。”と云っている。ここでは“呉楚”を一緒に論じているのである。

南宋時代には、客家人が江西南部(すなわち、今の贛州、于都と寧都一帯)に既に到達していた。当然、贛南に到達する以前に、彼らは先ず九江から舟に乗り、贛北の地域を経由しなくてはならなかった。その上、その内の一部は途中の地でそのまま留まり居を構えてしまった。しかし、湘贛の境界地域には、当時は彼らの足跡はまだなかったようだ。このため、当時の湘語区は今の江西西部の細長い地域をも含んでいたのに相違ないと思われる。

南宋時代の湘語の南の境は、今日の広西の域内にまで及んでいた。今日の広西の東北部の、湖南と隣接する全州、資源、灌陽、興安の四県では、全濁声母が残っており、現代漢語方言の分類からは古い湘語に属している。こうした方言分布の状況は歴史上の行政区の帰属と関係があり、その由来はずっと昔に遡ることができる。秦代から漢の初めまで、これら四県は、長沙を中心とする長沙郡(国)の域内にあったが、前漢中期以降は長沙国から分かれた零陵郡に属し、東晋(南朝)には、湘州に属した。隋代以降に、全州、資源、灌陽の三県の地域と興安県ははじめて零陵郡、それと桂林を中心とする始安郡に分かれて属した。唐代には零陵郡は永州と名が変わり、その中期以降は永州は湖南観察使轄区に属したが、北宋になってから永州から分かれて全州(轄清湘[現、全州]、灌陽の二県。その頃、資源県はまだ置かれていなかった。)となった。永、全

の二州はいずれも荆湖南路に属していた。このため、四県の地は南宋以前（興安県の地は東晋の以前からの地である）は、古い湘語の大本営（湘資流域）と同じ一級行政区にずっと属していた。南宋時代の湘語区は、南は今日の広西のこれら四県にまで及んでいたことは、疑問の余地のない事である。

4 閩語区

宋末における猪語の分布については第三章で既に述べた。

これまで、宋末の南方の幾つかの大方言の地理分布を大まかに説明してきた。現代漢語の南方方言の地理的分布の様子はとりもなおさず、宋代末に形成されたもので、その後は局部的にいくらかの変動があったに過ぎない。最も顕著なことは、以下の点である。明の永楽15年に鄭成功が台湾に入ったこと、清中期になって、閩南語と客家語が、相い前後して台湾に広がったこと、明・清の時代に、閩南語と客家語が海南島と広東の大陸沿岸に広がったこと、明末に閩南語が浙南の温州地区に入ったこと、皖南地区が広範囲にわたり、太平天国の後に官話地区に変わったこと、贛語と湘語の境界が、おそくとも清代中期になって、次第に明確になってきたこと、である。

5 北方方言区

宋、金時代の、北方語の分布は、大まかに言えば、北は長城（長城の外には、少数の漢人の居住地しかなかった）；西北は沙州（現、敦煌一帯）までで、そこは古代の辺境防衛の要塞であり、またシルク・ロードの要所でもあった；西は吐蕃と境界を接し；西南は今日の広西、貴州、雲南一帯までで、そこは少数民族の言語が絶対的に優勢な地であった。唐代の大文学者である柳宗元は、官位を下げられ柳州に下った時、《柳州峒氓》詩を作ったが、その詩からは柳州一帯の言語がどのように使われていたかを窺い知ることができる。

“郡城の南下は津に接通し、異服、殊音は親しむべからず。青き箬竹皮をもて塩を裹包む、婦峒の客、緑の荷はすもて飯を包む、趁墟の人。鷲毛は蠟を御もちいて山麩氈けおりものを織り、鶏骨をもて年を占い、水神を拝す。公庭に向かいて重訳を問うを愁い、章甫かんむりを投げ打ち文身をなさんと欲す。”

詩中の、所謂“峒客”とは明らかに少数民族を指しており、彼らの風俗習慣と言語は漢人とは異なったものであった。漢人が彼らと通話するには、いつも“重訳”（異なる言語を使い、幾度もの通訳を経た）を必要とすることから見て、その地の少数民族は雑居していて、言語は極めて複雑だった。唐・宋代の桂、滇、黔一帯では、漢語は大体において、いくらかの中心的な都市部しか使われず、その地の少数民族の言語の海原にあっては、全然影響力をもたない存在であった。

西晋末には、大量の北方人が南下したが、北方方言の区画の基本的な範囲は変わっていなかった。上文に引いた陸法言の《切韻考》では、北方方言の三地域である、燕趙、秦隴、梁益に言及しているが、陸法言は汴洛方言の立場からこれらの論を進めているのであるから、実際上は当時

の北方方言には少なくとも四種類、すなわち燕趙（河朔にあたる）、秦隴（秦にあたる）、梁益（巴蜀にあたる）、汴洛（中原にあたる）があった。

以上の論述に基づき、宋末の漢語方言区画の全図を推測した。図4-4を見よ。

第五章 上海地区の明清時代の方言地理

わが国の数千種に及ぶ地方志には、かなりのものが、その中に各地の方言資料を記載している。そうした言語資料には、単独で《方言志》として一冊にまとめたものや、《風俗志》、《地理志》などの巻末に付けられているものがある。それらの大半は、いくつかの方言語彙を記録しているに過ぎないが、一部にはその地方の方言の内部の差異を記載しているものもある。これらの一部の言語資料に基けば、比較的狭い範囲の中における方言区画を再構することが可能である。以下、明、清時代の上海地区の方言区画を使って、それを説明してみる。

今の上海地区に関する、明清時代に書かれた地方志118種を収集し調査したことがあるが、その内51種に、方言を紹介するか、或いは方言語彙を記録している資料が記載されている。^{原注9)} これらの資料に基けば、明、清時代における上海地区の方言は、この地区内においては、決して均質なものではなく、はっきりとした地域差が存在していたことがわかる。例えば、《紫堤村小志》（康熙17年）では、“三邑は壤とちを連ね、風土も合一なれど、語音は自ずから微たる分あり、嘉に属し、上に属し、青に属すも、総じて相い混ざらず。” こうして見ると、嘉定、上海、青浦の三つの地の土語には明らかに違いがあり、且つそれらは決して混乱することはなかったことがわかる。地方志の資料を利用すれば、各種の土語の分布する地区とそれぞれの大土語区の語音の特徴を確定することが出来る。

多くの地方志は土語間の異同を直に記述している。記述の仕方は大きく分けて次の2種類がある。一つは某地は某地に類する、某地は某地に近し、或いは某地は某地とは異なるなし、とするもので、二つ目には、軽し、重し、強し、急なり、遅なり、簡なり、煩なりという表現でもって、二箇所の語音の差異を対比するものである。こうした二種類の資料を分析することにより、明代の松江、清代の青浦県、金山県、奉賢県および嘉定県の方言内部の地理的な分布を知ることが出来る。

明代正徳年間に松江府（現代の崇明、宝山、嘉定を除く全上海地区にほぼ相当する）の方言は、二つの大区に分かれていた。華亭県（現在の松江県、奉賢県、金山県および青浦県の一部にほぼ相当する）と上海県（現在の上海市、上海県、南社県、青浦県の一部と川沙県に相当する）である。正徳年間の《松江府志》と正徳年間の《華亭県志》では、方言に言及する時は、いずれも次のことを記載する。すなわち、“府城は上海を視るに軽と為し、嘉興を視るに重と為す”，と。こ

原注9) ここで引いた方言誌の書目については、周振鶴、游汝傑〈方志所見上海地区16-19世紀方言地理〉《復旦大学歴史地理研究所所刊》第1期、復旦大学出版社、1986参照

れから見れば、当時の上海県の方言は、隣接する県の方言とは異なる特徴をすでに形成していたことがわかる。というのは、上海県が新しく生まれたために、府城の住民からは軽視されたのである。西部と南部の境界の地域には、幾つかの狭い範囲に広がる土語が見られ、それらは隣接する県とは、より近い関係にある。“風涇以南は平湖に類し、泖湖以西は呉江に類し、呉淞以北は嘉定に類し、趙村以北は昆山に類す。”と、記載されるのが、それである。（正徳年間の《松江府志》、《華亭県志》を見よ）

今日の青浦県の明清時代における方言は、北部では共通点が多く、南部では、“唐行（現、青浦県城）以南は華亭と相い似る”（嘉靖年間《上海県志》、同治年間《上海県志》を見よ）。“泗涇以南は華、婁に類す”（光緒年間《青浦県志》を見よ）境界に近い地域に分布する幾つかの狭い範囲の土語は隣接する県とことばが接近している。光緒年間の《青浦県志》には、“七宝以東は上海に類し、泗涇以南は華、婁に類し、双塔以西は元和に類し、泖湖以西は呉江に類し、小蒸の西南は嘉善に類し、趙屯の西北は昆山に類し、呉淞以北は嘉定に類す。”康熙年間《松江府志》の記載はほぼ同じである。

清代の金山県の方言は、東部が奉賢県の西部と一致しており、西部は“風涇以南は嘉善（浙江省）に類し、朱涇以南は平湖（浙江省）に類し”ている。（康熙、嘉慶年間《松江府志》、乾隆年間《金山県志》を見よ）。

清代の奉賢県の方言は、内部がはっきりと東と西の二つの区域に分かれていた。東の区域は県城である奉城が中心で、西の区域は重鎮である南橋（民国後は県の所在地がここに移った）が中心である。東の区域は上海県の方言に近く、一方の西の区域は華亭県の方言に近い。乾隆年間の《奉賢県志》には、“その言語は東西互いに異なり、東半の邑は上海、南匯に相い似て、西半の邑は華亭、婁に相い似る”とある。光緒年間の《奉賢県志》にも同様の記載が見られる。近年の実地調査に依れば、今日の奉賢県の方言は依然として、東と西に大きく分かれている。東西のことばの差異は少なくとも既に二百年余りを経ているにも関わらず、依然融合していないのである。

明、清時代の嘉定県の方言内部における地域差に対して、ここに引証できる直接的な資料を持ち合わせていないが、方言の地理的分布の変遷が緩やかなことを考えると、民国の《嘉定県志》にある関連資料は参考にすることができる。そこには、“東南と西南は清濁迥あきらかに殊ことなり、陳店、江橋は上海に類し、紀王、諸翟は上海を視るに軽と為し、清浦を視るに重と為し、黄渡、西勝塘は青浦に相い似て、安亭は昆山に類して略や重く、陸渡橋は太倉に似て、鼻音を用いること少なく、南翔は各郷に較べるに特殊たりて、一の字の音は時に舌尖と唇齒を併せて用いるもの有り、喫を呼云いて缺となすの類の如し。”とある。

清代の川沙庁と南匯県の方言は、上海県に似ている。“上（海）と南（匯）”は、いつもいっしょにとりあげられており、川沙は“上、南と異なる無し”（光緒年間《川沙庁志》を見よ）の如くである。宝山県の方言は嘉定県と一致している。宝山県は呉淞江の北にあり、多くの地方志はどれも“呉淞以北は嘉定に類す”と述べている（正徳年間《松江府志》、嘉慶年間《松江府志》な

ど)。崇明は元は砂洲であって、唐代の万歳、通天年間になり、やっと開墾され田となった。“民は皆、淮浙より来りて附あつまりし者なり”（正徳年間《崇明県志》）このため、“発音宏亮たりて江北に近くして、言語の江南に同じくする者は什の九割なり（民国《崇明県志》）。このことから推定して、その方言は江を隔てた対岸の嘉定と宝山に近いと考えることができる。

以上述べてきたことをまとめると、次のように結論することができる。

すなわち、上海地区は16世紀から19世紀にかけて、その方言は、内部では、南北二つの大きな区域に分かれていた。南と北は、ほぼ呉淞江をその境界にする。呉淞江の北岸の黄渡から江橋へ続く細長い地帯が南区に属し、黄浦江の下流東岸の高橋一帯が北区である。

地方志が記録する方言資料は往々にして極めて繁雑なもので、全てが全て信用し資料に用いることの出来るものとは限らない。その原因には、大体三つある。一つにはその編纂者が必ずしも言語学に通じているわけではないこと。二つには、当時の言語学のレベルには制約があること。三つには、後世の地方志は往々にして先行の地方志を踏襲しており、前の誤りをそのまま引き継いでいるためである。そのため、それらの資料を使うときには、充分慎重に扱い、雑なるものを捨て、精確なものを残し、正しいものを追求して、誤りを訂正する必要がある。ここでその例を挙げて説明をする。

信用して使うことができる資料。例えば、乾隆、光緒年間の《奉賢県志》はどちらも奉賢の土語が東と西の二つに分かれている、としているが、現代の方言調査の結果と比較しても、それはまったく信用できる記述である。例えば、“庚は陽に従う”という特徴のように、それぞれの地方志の挙げる例字は極めて豊富である。光緒年間の《羅店鎮志》には、“争は呼ぶに側羊の反の如くにして、葉陽の韻なり。烹は呼ぶに普羊の反の如くにして、葉陽の韻なり。羹は、俗に呼ぶに古涼の反の如くにして、葉陽の韻なり。更は、俗に呼ぶに公良の反の如くにして、葉陽の韻なり。坑は呼ぶに苦央の反の如し。”ここで現代上海市街区の言葉でもって比較してみると、庚の韻と陽の韻はいずれも鼻音化し〔ã〕で読まれる。故に“庚は陽に従う”という記述は信用できるものである。

幾つかの資料は間違っていて、信用が出来ない。例えば、ほとんどの方言が“泰は箇に入充る”という特徴に触れている。しかし、実際にはこれは、誤りをそのまま引き継いだものである。いわゆる“泰は箇に入る”の例として、各地方志はいずれもが“大は惰の如し”の一例しか挙げてはいないのである。“大”は切韻音系では、元々すでに、箇の韻^{注5)}と泰の韻^{注6)}の二つを有していた。一例に挙げている“大”は、泰の韻の方でなく、口語音である箇の韻の方の“大”であって、“大は読むに、惰の如し”というのは、文白異読の問題なのである。現代の各地の呉語は全てそのようになっている。その上、現代の上海語の泰の韻の字を調べると、例えば、兌、最、会、絵などはいずれも箇の韻の〔u〕では読まない。こういう訳で、非常に沢山の地方志が皆“泰は箇に入る”ということに記載してはいるが、これはやはり信用できないのである。

幾つかの資料は、編纂者がそれを誤りと考えていたものが、実際にはその中に拠るべき言語規則が隠れていることがある。例えば、嘉慶年間の《上海県志》には、“鬼は拳の如し、婦は居の如し、跪は巨の如し、緯は諭の如し、虧は去の平声の如し、達は衢の如し、椅は于據の切に読み、小兒毀（孩子真乖）の毀は許の如し、声は相い近きも、これ誤りなり。”と、ある。しかし実際には、これらは声母が近い音だが誤りだ、という訳ではけっしてなく、語音が歴史的規則に則って変化してきた結果なのである。切韻音系では、鬼、婦、緯はいずれも微の類に属し、詭、毀、虧、達はどれも支の類に属し、拳、巨、居、許、衢はいずれも虞の類に属した。これらの例字の中から“支と微の韻は魚の韻に入る”という規則が導き出されるのである。ただし、“椅”はもともと支の類に属していたので、この規則には当てはまらない。これを、現代の上海語の中で見てみると、鬼、婦（口語音）、亀、跪、貴などはいずれも〔y〕に読み、魚の韻の喉牙音も〔y〕に読む。故に、“支の韻と微の韻は魚の韻に入る”というのは、語音の変遷規則に合った正しい通則なのである。

幾つかの資料は訂正されるべきである。例えば、“灰は麻に入る”というのは、（上海地区の）南区の地方志の多くが皆、言及しているものだ。それらの地方誌の挙げる例が“槐の音は華の如し”という唯一の例に限られていることから考えてみれば、これは“佳は麻に入る”と帰納すべきなのである。“槐”は切韻音系では、皆の韻と塵の韻の二つに読まれたのである。現代の上海語から見れば、灰の韻は喉音で〔ue〕に読み、匯、灰、回、煨がそうで、〔a〕に読むものは無い。又、佳の韻は〔a〕に読み、懷、淮、歪がそうである。一方、麻の韻には〔a〕に読むものがあり、耶、爺、蛙、鴉がそうであるが、〔ue〕に読むものは無いからである。

注

- 注1) 本翻訳は、周振鶴、游汝傑著《方言与中国文化》1986年上海人民出版社の第4章の抄訳である。
注2) 林語堂〈前漢方音区域考〉《語言論叢》1933開明書店 この論考に関しては、最近 西田龍雄先生が研究を発表された。『東アジア諸言語の研究Ⅰ』2000年京都大学学術出版
注3) 周王朝の言語及びその諸国である宋、魯などの言語を指す。
注4) 《孟子・滕文公下》。本訳文では、原文に引用された字句などについて、校訂、訂正を記載しない。原文のままとする。尚、著者による原注は、該頁に脚注として記載した。訳者による、注は訳文末尾に記載した。
注5) 口語音、韻母は〔u〕
注6) 文言音、韻母は〔ɑ〕